

司書資格取得希望者の意識に関する研究：山梨英和大学を事例として

青柳 英治
(明治大学)

【要旨】

本稿の目的は、山梨英和大学司書課程における司書資格取得希望者の動機や意識を含めた特徴を明らかにすることである。研究の方法としては、質問紙調査を用い先行研究の LIPER 調査の結果と比較検討を行った。加えて、山梨県の学校図書館や読書活動に関する統計データを収集し検討した。検討の結果、次の3点が明らかになった。①LIPER 調査との類似点は、司書資格取得希望者は、本が好きで、公共図書館の利用経験を持ち、そのような経験や本に対する嗜好の影響を受けて、司書資格を取ろうとしていること、②相違点は、英和大調査の回答者の方が、小・中・高校での読み聞かせの機会が多いこと、③相違点が生じた背景には、近年、1校当りの学校図書館図書購入費や全校一斉の読書活動などの数値が高水準で推移している状況などが影響していると推察できることである。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年、地方自治体の厳しい財政事情によって、公共図書館における司書の採用数は、減少傾向にある。さらに、業務の効率化や経費の削減を目的として、指定管理者制度や PFI 制度などによる業務の委託化が進みつつある。そのため、今日では、司書課程を履修する学生が、正規の図書館専門職員として就職することが困難になっている。こうした状況は、大学や短期大学での司書資格の取得ガイダンスでも、学生に説明されているが、むしろ、資格の取得を希望する学生数には増加の傾向が見られる¹⁾。

こうした背景を踏まえ、日本図書館情報学会（以下、JSLIS という）は、2004 年に情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する調査研究（以下、LIPER）プロジェクトを立ち上げた。LIPER の実態調査班の一つである図書館情報学教育班は、「司書・司書教諭資格取得希望学生の意識についての調査」²⁾（以下、LIPER 調査）を行った。LIPER 調査の目的は、6つの項目（①資格取得に対する考え方や意欲、②図書館利用経験と本に対する嗜好、③図書館に対するイメージ、④図書館員に対するイメージ、⑤どのような知識が得られるか、⑥将来の職業との関連）をとおして、司書・司書教諭資格取得希望者の資格取得の動機と、これまでの図書館活動への参加状況などを明らかにすることであった。

本稿の目的は、全国規模の調査である LIPER 調査との類似点や相違点の比較検討をとおして、山梨英和大学司書課程における司書資格取得希望者の動機や意識を含めた特徴を明らかにすることである。

(2) 研究の方法

LIPER 調査で使用された質問紙を準用し、筆者の前任校である山梨英和大学（以下、英和大という）において質問紙調査（以下、英和大調査という）を実施した。また、検討の結果から得た相違点については、山梨県の学校図書館や読書活動に関する文部科学省の各種統計データを整理することによって、その背景を検討した。

(3) 先行研究

本研究に関する先行研究には、先述した LIPER がある³⁾。LIPER は、JSLIS によって 2004 年度から 3 年間にわたり、科学研究費補助金を受けて実施された図書館情報学教育に関する共同研究である。LIPER では、主に次の 3 点の提言がなされた。①将来的には大学院レベルでの専門教育を標準とすべきこと、②それまでは司書課程のカリキュラムを館種間の共通の基礎領域とすること、③図書館情報学検定試験の実施を検討することである。

LIPER は 4 つの実態調査班に分かれており、その一つに先述した図書館情報学教育班がある。同班が実施した LIPER 調査は、2004 年 4 月～8 月に全国 18 大学（短期大学を含む）の司書・司書教諭資格の取得が可能な課程（専門学部・学科を含む）において、司書・司書教諭資格を取得したいと考える学生の資格取得の動機や意識を質問紙調査によって明らかにしている。

司書・司書教諭の養成に関する研究は、これまで、図書館情報学教育担当者の観点から行われてきた⁴⁾。そのため、資格取得希望者の動機や意識については、資格取得の教育に携わっている教育担当者が、履修生と接することによって得られる印象をもとに把握されており、LIPER 調査のような実証的な研究は行われていない。その具体的な内容については、次章以降、英和大調査の結果と比較検討する中で紹介したい。

2. 調査の結果

(1) 調査の概要

英和大調査は、英和大司書課程における司書資格取得希望者の特徴を明らかにするための基礎資料とすることを目的として、司書課程科目を履修する学生（2 年～4 年、大学院生、科目等履修生）を対象に、2008 年 4 月～5 月にかけて実施した。

調査の方法は、授業の最後に担当教員が調査の趣旨を説明し、質問紙を配布のうえ、その場で学生に回答を依頼し回収した。調査を実施した授業科目は、資料組織演習、図書館サービス論、情報検索演習、図書館情報論 1、情報サービス概説の 5 科目である。なお、LIPER 調査の対象校に英和大は含まれていない。また、質問項目のうち LIPER 調査と英和大との運営組織上の相違点（属性、司書教諭課程の有無など）については、英和大の実態に合わせて一部修正を加えた。

調査の結果、109 名から調査票を回収できた。うち、十分な回答が得られなかった 5 名を除き、有効回答数は、104 名であった。

(2) 回答者の属性

1) 性別

回答者の性別内訳は、男子学生 20 名、女子学生 84 名であり、2 : 8 の比率であった。

平均値ではあるが、LIPER 調査も同様の比率である。

2) 年齢

年齢区分の内訳は、～19 歳 (30.8%)、20～29 歳 (66.3%)、30～39 歳 (1.9%)、40～49 歳 (1.0%) であった。一方、LIPER 調査では、～19 歳 (64.0%)、20～29 歳 (34.4%) の順であった。

3) 学年

回答者の学年は、2 年 (44.2%)、3 年 (39.4%)、4 年 (11.5%) であった。一方、LIPER 調査では、1 年 (49.4%)、2 年 (22.8%)、3 年 (16.6%)、4 年 (8.9%) であった。年齢と学年における LIPER 調査との相違は、英和大では 2 年次から司書資格科目の履修が始まるために生じたと考えられる。

4) 所属学部

LIPER 調査では、回答学生の所属学部を尋ねている。しかし、英和大は、1 学部 1 学科 (人間文化学部人間文化学科) の単科大学であり、学生は全員この学科に属する。学科のもとには、3 つの分野 (調査当時) が設定され、学生の興味や関心に合わせて、各分野の科目を横断的に履修できる仕組みとなっていた。そのため、英和大調査では、回答者が特に力を入れて学んでいる分野を尋ねることで、所属学部を読み替えた。その結果、表現文化分野 (45.2%)、心理カウンセリング分野 (41.3%)、情報メディア分野 (11.5%) であった。表現文化分野と心理カウンセリング分野は人文科学系、情報メディア分野は情報・社会科学系に含まれる。一方、LIPER 調査での回答者の所属学部は、文学部 (49.7%) が最も多く、法学部 (2.4%) や経済学部 (2.3%) などの社会科学系学部の比率は低くなっており、英和大と同様の傾向を示している。

5) 回答者の出身高校の所在地

この質問は、英和大調査独自の項目である。その理由として、英和大は地方の私立大学であるため、回答者の出身県に一定の傾向が見られると推測できるからである。調査の結果、山梨県 (68.3%)、長野県 (20.2%) の順であり、この 2 つの県で 8 割強を占めていることがわかった。

(3) 結果の詳細

LIPER 調査は、各質問項目に応じて資格課程 (司書・司書教諭資格の両方を含む) と希望資格の種類別 (司書希望者、司書教諭希望者)、そして、全体 (種別の区分なし) に区分のうえ、集計・分析している。各質問項目の検討では、必ずしも希望資格の種類別にクロス集計が行われているわけではない。英和大は司書課程のみ設置されているため、司書希望者の集計結果と比較することが望ましいが、司書希望者の集計結果が示されていない質問項目は、資格課程や全体の集計結果を用いて検討する。

以下では、先述した 6 つの項目について、単純集計、クロス集計、ならびに選択肢を点数化した平均値の算出を行い、LIPER 調査との比較検討を行った。

1) 資格取得に対する考え方や意欲

① 資格取得に対する態度

司書資格の取得希望者は 94 名 (90.4%)、非希望者は 10 名 (9.6%) であった。一方、LIPER 調査 (資格課程) では、希望者 70.6%、非希望者 5.0% であった。男女別では、男

子学生の 25.0%、女子学生の 6.0%が非希望者であった。一方、LIPER 調査（資格課程）では、男子学生 14.1%、女子学生 2.7%であった。

英和大調査と比べて、LIPER 調査での司書資格取得希望者の比率が低くなっている。この理由として、LIPER 調査では、5つの回答形式（1.司書資格を取得希望、2.司書教諭資格を取得希望、3.両方の資格取得を希望するが司書を強く希望、4.両方の資格取得を希望するが司書教諭を強く希望、5.資格取得の希望なし）を取っており、数値が分散したためと考えられる。なお、「司書を強く希望」も含めると 81.5%となる。

英和大調査での非希望者は、すべて「図書館情報論1」の授業での回答者であった。この科目は、司書資格取得科目のための科目というだけでなく、卒業認定単位となる専門科目にも位置づけられているため、履修者の一部に資格取得を希望しない者が含まれていたと考えられる。以降の質問項目では、資格取得希望者 94 名を検討の対象とする。

② 資格取得にかかる意欲

最も取得の意欲が高い項目である「他の科目を犠牲にしても科目を履修する」と回答した者は、59.6%であった。一方、LIPER 調査（司書希望者）では、54.6%であった。以下、「時間割によってはあきらめる」37.2%（LIPER 調査：42.6%）が続く。LIPER 調査も比率に若干の差はあるが同様の傾向である。

③ 資格取得の理由

資格取得の理由としては、表 1 に示したように「図書館で働きたいから」「何か資格を取りたいから」「図書館が好きだから」と続く。一方、LIPER 調査（資格課程）では、1位と2位の順序が逆ではあるが、ほぼ同様の傾向である。男女別では、この3つの理由については、1位と2位は女子学生の比率が高く、3位は男子学生の比率が高い。

表 1 資格取得の理由 n=LIPER 調査（資格課程）：1,044

質問項目	本調査		LIPER調査		質問項目	男子学生	女子学生
図書館で働きたいから	1	25.5 %	2	22.4 %	図書館で働きたいから	6.7 %	22.1 %
何か資格を取りたいから	2	23.4 %	1	25.4 %	何か資格を取りたいから	13.3 %	25.9 %
図書館が好きだから	3	22.3 %	3	20.1 %	図書館が好きだから	26.7 %	8.9 %

④ 資格取得を考えた時期

資格取得を考えた時期は、「大学入学後」（48.9%）、「高校生」（33.0%）、「小中学生」（16.0%）と続く。一方、LIPER 調査（資格課程）は、同じ順に 50.1%、36.5%、11.5%であり、同様の傾向である。

⑤ 司書以外の資格取得の希望

「学芸員資格」が 23.4%と最も多い。次いで、「その他」が 17.0%と続く。その他の内訳は、認定心理士が大部分を占めている。この理由として、英和大の特色の一つに心理学の知識を修得できることが考えられる。一方、LIPER 調査（全体）では、「教員免許」（34.1%）、「パソコン検定」（23.9%）、「学芸員」（19.2%）と続く。

2) 図書館利用経験と本に対する嗜好

① 図書館や本に接する機会

この質問項目は、選択肢を点数化（「ない」＝0、「あまりない」＝1、「たまに」＝2、

「よく」＝3)して平均値を算出している。その結果、英和大調査と LIPER 調査(司書希望者)とも、公共・学校・大学図書館の利用経験はあるが、図書委員や図書館での体験学習など、図書館や本に接する機会については、経験が多くないことがわかった。

両調査の利用・接触の機会は、同様の傾向を示しているが、小・中・高校での読み聞かせの時間を問う質問については、図1に示すように英和大調

査の方が0.46上回っていた。本稿では、英和大調査と LIPER 調査との差が、統計的に有意であるかどうかを検証するため、Wilcoxon の順位和検定を行った。検定の結果、 $p=0.0000001$ となり、有意差が認められた。英和大における「読み聞かせ」の時間は、LIPER 調査の結果より有意に多く、英和大調査の特徴の一つとして捉えることができる。

② 本に対する嗜好

本が好きかどうかを尋ねた質問については、「とても好き」「やや好き」が合計で 96.1% であり、肯定的な回答が多かった。一方、LIPER 調査(全体)では、合わせて 93.2% であり、同様の傾向であった。

③ 経験・嗜好の影響についての認識

先述した図書館や本に接する機会と本に対する嗜好が、司書資格を取得する意欲や態度に影響を与えていると考えるかという質問に対して、「とても思う」と回答した者が 35.6% であった。一方、LIPER 調査(資格課程)では、30.9% であった。

3) 図書館に対するイメージ

① 図書館についての認識

「図書館」と聞いて連想する図書館については、「近くの公共図書館」(63.5%)、「大学の図書館」(18.3%)、「中高の図書館」(14.4%) の順であった。一方、LIPER 調査(司書希望者)では、同じ順に 75.3%、11.0%、10.1% であり、比率に若干の差は見られるが同様の傾向である。

また、図書館は、どういう場所かを尋ねた質問については、「本を借りるところ」(50.0%)、「様々な情報を入手するところ」(20.2%)、「本を読むところ」(11.5%)、「調べものをするところ」(10.6%) と続く。一方、LIPER 調査(全体)では、同じ順に 45.5%、27.6%、9.0%、14.0% であった。3 位と 4 位の順序が逆になっているが、ほぼ同様の傾向である。男女別では、「調べものをするところ」と答えた男子学生(20.0%) の比率が女子学生(10.0%) よりも高かった。一方、LIPER 調査(全体)でも同様の傾向であった(男子 21.9%、女子 12.0%)。

② 図書館のイメージ

図書館のイメージについては、10 種類の形容詞を列挙して、それが当てはまるかどうかを尋ねた。選択肢を点数化(「全く思わない」＝0、「あまり思わない」＝1、「やや思う」

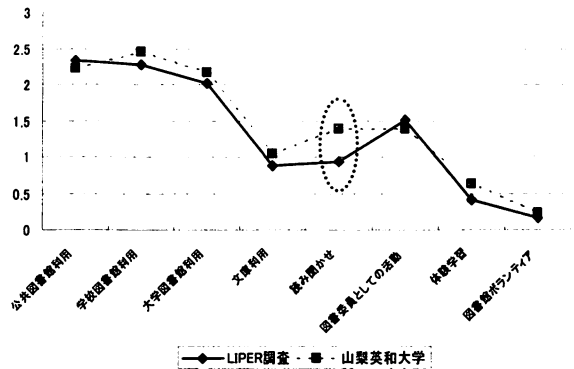


図1 図書館等の利用経験

= 2、「とても思う」= 3）して平均値を求めた結果、図2に示すように、「静かな」(2.66)、「便利な」(2.38)、「知的な」(2.35)が上位を占めた。一方、LIPER調査(全体)では、同じ順に2.72、2.23、2.43となっており、2位と3位の順序が逆ではあるが、ほぼ同様の傾向である。

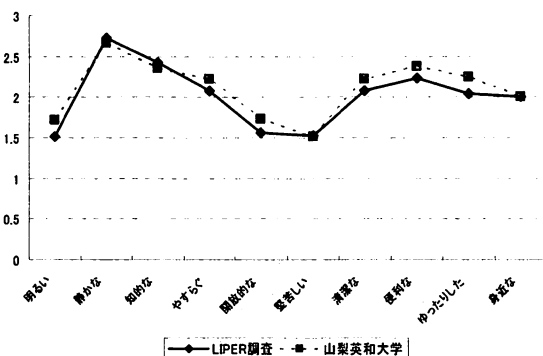


図2 図書館のイメージ

4) 図書館員に対するイメージ

① 図書館員についての認識

「図書館員」と聞いて連想する図書館員については、「近くの公共図書館員」(47.1%)、「大学図書館の職員」(24.0%)、「学校図書館の職員」(21.2%)の順であった。一方、LIPER調査(全体)では、同じ順に62.7%、15.7%、18.3%であった。LIPER調査では、大学・学校図書館員のイメージに比べ、公共図書館員に対するイメージがより強く、かつ2位と3位の順序が逆になっていた。

② 図書館員のイメージ

図書館員のイメージについては、10種類の形容詞を列举して、それが当てはまるかどうかを尋ねた。図書館のイメージと同様、選択肢を点数化して平均値を求めた結果、図3に示すように「知的な」(2.15)、「頼りになる」(2.14)、「几帳面な」(2.13)が上位を占めた。一方、LIPER調査(全体)では、「静かな」(2.24)、「几帳面な」(2.18)、「知的な」(2.17)が上位を占め、両調査間に差異が見られた。英和大調査で2位の「頼りになる」はLIPER調査では5位(1.93)であり、LIPER調査で1位の「静かな」は英和大調査では4位(2.0)であった。

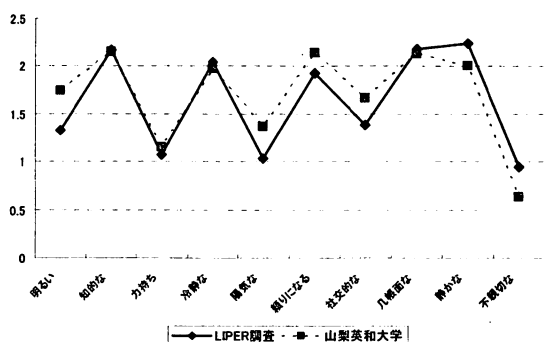


図3 図書館員のイメージ

5) どのような知識が得られるか

司書資格取得のための科目を履修することによって得られる知識は、「図書館のサービス」(68.3%)、「本の分類や整理について」(53.8%)、「図書館の管理運営について」(48.1%)が上位を占めた。LIPER調査(全体)の方が、同じ順に80.2%、66.7%、64.1%と全体に比率が高いが、項目の順位は変わらない。

6) 将来の職業との関連

司書資格を取得することと将来の職業との関連については、「司書でなくても、少しでも学んだことが活かせる職場で働きたい」(38.5%)、「図書館などで司書として働きたい」

(32.7%) が上位を占めた。一方、LIPER 調査（全体）では、37.6%、32.3%であり、同様の傾向であった。

(4) 資格取得に特に積極的な学生

英和大調査で明らかになったことを踏まえ、以下の条件に合致する学生を「資格取得に特に積極的な学生」と捉えてデータ抽出した。

- 1. 資格取得を希望する学生
- 2. 他の科目の履修を犠牲にしても資格取得を希望する学生
- 3. 資格取得の最大の理由が図書館で働きたいからという学生
- 4. 将来の職業についても、資格や専門を生かして図書館などで司書として働きたいとする学生

その結果、この条件を満たす学生は 12 名（資格取得希望者の 12.8%）であった。一方、LIPER 調査（資格課程）では、10.5%であった。英和大調査と比較したこうした学生の特徴として、表 2 に示した 9 点が挙げられる。LIPER 調査から導き出された「資格取得に特に積極的な学生」と比較すると、図書館については、利用者に役立つ身近な公共図書館という認識を、図書館員については、頼りがいのある公共図書館員というイメージを持っていることがわかる。

表 2 資格取得に特に積極的な学生の比較

	本調査	LIPER調査
学年	3年生	1年生
性別	女子学生	女子学生
図書館利用経験	よく利用する	よく利用する
図書館活動経験	少ない	多い
本への関心	6割強が「とても好き」	とても好き
図書館の認識	大学・学校の図書館を連想する回答者の比率が低い	大学の図書館を連想する回答者の比率が高い
図書館のイメージ	肯定的 癒しの空間（やすらぐ、便利、身近な）	肯定的（明るく、開放的、堅苦しくない）
図書館員の認識	大学・学校図書館員を連想する回答者の比率が低い	大学図書館員を連想する回答者の比率が比較的高い
図書館員のイメージ	肯定的 頼りがいがある（力持ち、陽気な、頼りになる）	肯定的（明るい、陽気な、社会的）

3. 山梨県の学校図書館と読書活動に関する状況

これまでの検討をとおして、英和大調査と LIPER 調査との類似点としては、「本が好きで、公共図書館の利用経験を持ち、そのような経験や本に対する嗜好の影響を受けて、司書資格を取ろうとしている」点を明らかにできた。両調査の結果には、多くの項目に類似点が認められた。一方、LIPER 調査との相違点としては、英和大調査の回答者の方が、小・中・高校での読み聞かせの機会が多い点を明らかにできた。英和大調査の回答者の出身高校の所在地を問う質問では、山梨県で 6 割強を占めていることがわかった。そのため、回答者の教育を受けた地域特性も考慮に入れて検討する必要があると考える。

本章では、この点に注目し、山梨県の学校図書館と読書活動の状況に関する統計データを整理し、その背景を検討する。

まず、学校図書館の状況を示す指標として、図書購入費の状況を検討する。学校図書館図書費は、「学校図書館図書整備 5 か年計画」に基づき、学校図書館図書標準の充足を目的に、2002 年度から 2006 年度までの 5 年間、地方財政措置が行われた。この期間中に、公立義務教育諸学校の学校図書館図書資料を約 4 千万冊整備することを目指し、毎年約 130 億円、総額で約 650 億円の地方交付税措置が講じられた。引き続き、2007 年度から 2011 年度の 5 年間に、毎年約 200 億円、総額で約 1,000 億円の措置が予定されている⁵⁾。

表 3 は、2001 年度から 2006 年度までの公立小・中学校における、山梨県の 1 校当りの

表3 山梨県の1校当りの図書購入費の推移

決算年度	県名	公立小学校				公立中学校			
		現在の 学校数 (A)	学校図書館 図書購入費 の(B)	1校当たり の 図書購入費		現在の 学校数 (A)	学校図書館 図書購入費 の総(B)	1校当たりの 図書購入費 (B/A)	
				順位	金額			順位	金額
2006年度 決算額	全国合計	22,028	9,379,661	—	426	10,062	6,078,636	—	604
	山梨県	205	132,880	2	648	96	80,867	3	842
2005年度 決算額	全国合計	22,230	9,044,512	—	407	10,116	5,967,844	—	590
	山梨県	205	137,773	1	672	97	81,957	2	845
2004年度 決算額	全国合計	22,468	9,431,440	—	420	10,164	6,158,487	—	606
	山梨県	207	143,026	1	691	96	85,855	3	894
2003年度 決算額	全国合計	22,568	9,708,025	—	430	10,226	6,465,001	—	632
	山梨県	206	136,009	2	660	96	88,019	3	917
2002年度 決算額	全国合計	22,738	9,579,706	—	421	10,251	6,371,123	—	622
	山梨県	207	146,443	1	707	98	90,605	3	925
2001年度 決算額	全国合計	22,980	9,680,833	—	421	10,397	6,415,896	—	617
	山梨県	207	145,617	1	703	98	85,962	5	877

図書購入費の状況を示したものである。

参考として全国の合計値も掲載した。この表のデータは、「学校図書館の現状に関する調査」⁶⁾(文部科学省)から抽出した。調査の結果は、冊子体で刊行されておらず、同省のホームページで過去6年分のみ公開されている。この表から、1校当りの図書購入費については、近年、山梨県では、公立小学校ではほぼ最上位に位置し、公立中学校では上位3位以内を推移していることがわかる。

表4 山梨県の図書購入費の予算措置率

単位：千円						
予算年度	県名	図 書 購入費 (A)	おおよその 基準財政 需要額 (B)	予算措置率 (A) / (B)		
				順位	比率	
小学 校	2007年度 予算額	全国合計 山梨県	9,340,378.8 139,067.6	10,883,907.6 84,352.8	— 1	85.8 164.9
	2006年度 予算額	全国合計 山梨県	9,533,921.9 137,192.0	7,127,979.4 55,961.6	— 2	133.8 245.2
	2007年度 予算額	全国合計 山梨県	6,253,112.6 79,975.0	9,103,242.5 73,849.0	— 2	68.7 108.6
	2006年度 予算額	全国合計 山梨県	6,307,255.4 82,286.1	6,000,597.1 48,096.0	— 2	105.1 171.1

表4は、2006、2007年度の公立小・中学校における山梨県の予算措置率を示したものである。参考として全国の合計値も掲載した。この表のデータは、「学校図書館図書関係予算措置状況調べ」⁷⁾(文部科学省)から抽出した。同省では、2006年度からデータを公開している。この表から、山梨県の予算措置率は、公立小・中学校ともにほぼ最上位に位置していることがわかる。なお、基準財政需要額とは、地方公共団体が、合理的かつ妥当な行政を実施・維持するための財政需要を算定した額であり、普通交付税措置の算定基礎となるものである⁸⁾。各地方公共団体の基準財政需要額は、行政項目ごとに一定の算式⁹⁾を用いて算定される。

次に、読書活動の状況を示す指標として、まず、公立小・中・高校での①図書の読み聞かせとブックトークの実施、②全校一斉の読書活動の実施、ならびに、③学校図書館担当職員の配置状況を検討する。表5は、これらの状況を示したものである。この表のデータのうち、全国の状況は、先述の「学校図書館の現状に関する調査結果」から抽出し、山梨県の状況は、山梨県教育委員会義務教育課から入手した。

山梨県と全国の状況を比較する。まず、①では、山梨県は、2006年度まで(高校を除く)、全国合計よりも、実施の比率が高い。しかし、年を追うごとに、全国的に実施の比率が高まった結果、山梨県は、2007年度に全国の状況を下回った。次に、②では、山梨県は、すべての学校区分において、全国合計よりも実施の比率が高い。特に、公立高校での実施率

が高く、年を追うごとに全国合計との差が大きくなる傾向にある。最後に、③では、山梨県は、概ね配置率が高い状況にある中で、特に、公立小・中学校での配置率が高い。

読書活動の状況を示すその他の指標として、「子ども読書活動推進計画」の策定状況を検討する。この計画は、2001年11月に議員立法によって、法案が国会に提出された。同年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定されたことを受け、同法第8条第1項の規定に基づき、2002年8月に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」として策定されたものである¹⁰⁾。

この計画では、子どもの読書活動の推進、そのための施設の整備など、5年間の施策の基本的方向と具体的な方策を明らかにしている。また、同法第9条では、都道府県と市町村での計画策定についての努力義務化を謳っている。2008年3月には、これまでの成果や課題などを検証し、新たな取り組みを整理した第2次計画が閣議決定された¹¹⁾。

表6は、2008年3月現在の山梨県の市町村における「子ども読書活動推進計画」の策定状況を示したものである。この表のデータは、「都道府県

及び市町村における「子ども読書活動推進計画」の策定状況に関する調査結果について」¹²⁾

(文部科学省) から抽出した。この表から、山梨県内の市町村において、既に計画が策定済みである自治体の比率は、14.3%であり、全国の策定済みの自治体の比率と比べて、半数となっている。しかし、計画が策定作業中である自治体も含めると46.4%となり、全国の策定作業中の自治体を含めた比率よりも1.9ポイント高くなる。そのため、一定の時間が経過することによって、策定済みの自治体数が増えることが見込まれる。先述のように、山梨県では、これまで、図書の読み聞かせとブックトークの実施状況が高かったが、「子ども読書活動推進計画」については、他の都道府県の市町村での計画策定状況（策定済みと策定作業中を含む）と比較すると全国で23位である。

以上、6つのデータを用いて、山梨県における学校図書館と読書活動の状況を整理すると次のようになる。山梨県では、公立小・中学校において、①1校当りの図書購入費が高く、②図書購入費の予算措置率も高く、③学校図書館担当職員の配置が全国の2倍以上の

表5 山梨県の学校図書館における読書活動の状況の推移

	県名	学校種別	学校数 (A)	読み聞かせ・B.T		一斉読書		学校図書館担当職員	
				実施 校数 (B)	比率 (B/A)	実施 校数 (B)	比率 (B/A)	配置 校数 (B)	比率 (B/A)
2007年度	全国合計	小学校	21,858	16,992	90.2%	20,642	94.4%	7,786	35.6%
		中学校	10,020	2,319	36.6%	8,426	84.1%	3,545	35.4%
		高等学校	3,840	350	15.2%	1,418	36.9%	2,820	73.4%
	山梨県	小学校	204	179	87.7%	201	98.5%	188	92.2%
		中学校	96	31	32.3%	94	97.9%	86	89.6%
		高等学校	34	2	5.9%	23	67.6%	34	100.0%
2006年度	全国合計	小学校	22,028	16,324	74.1%	20,641	93.7%	7,228	32.8%
		中学校	10,062	2,143	21.3%	8,175	81.2%	3,394	33.7%
		高等学校	3,901	332	8.5%	1,473	37.8%	2,910	74.6%
	山梨県	小学校	205	179	87.3%	203	99.0%	185	90.2%
		中学校	96	27	28.1%	90	93.8%	91	94.8%
		高等学校	34	2	5.9%	24	70.6%	31	91.2%
2005年度	全国合計	小学校	22,230	15,727	70.7%	20,305	91.3%	7,007	31.5%
		中学校	10,078	2,075	20.6%	7,858	78.0%	3,277	32.5%
		高等学校	3,905	346	8.9%	1,355	34.7%	2,970	76.1%
	山梨県	小学校	205	173	83.6%	200	96.6%	192	93.7%
		中学校	96	30	31.3%	87	90.6%	88	91.7%
		高等学校	35	1	2.9%	19	54.3%	34	97.1%
2004年度	全国合計	小学校	22,468	-	-	19,876	88.5%	-	-
		中学校	10,164	-	-	7,516	73.9%	-	-
		高等学校	3,934	-	-	1,264	32.1%	-	-
	山梨県	小学校	207	-	-	194	94.2%	-	-
		中学校	97	-	-	83	86.5%	-	-
		高等学校	36	-	-	16	44.4%	-	-
2003年度	全国合計	小学校	22,568	-	-	19,898	88.2%	-	-
		中学校	10,226	-	-	7,607	74.4%	-	-
		高等学校	3,981	-	-	1,312	33.0%	-	-
	山梨県	小学校	206	-	-	178	86.0%	-	-
		中学校	96	-	-	77	79.4%	-	-
		高等学校	36	-	-	16	47.1%	-	-

表6 山梨県の市町村における「子ども読書活動推進計画」の策定状況 (2008年3月31日現在)

	域内の 市町村数	策定 済み	(%)	策定 作業中	(%)	検討中	(%)	策定の 予定なし	(%)
全国合計	1,812	567	31.3	239	13.2	598	33.0	408	22.5
山梨県	28	4	14.3	9	32.1	10	35.7	5	17.9

高さであること。そして、④すべての学校区分で一斉読書に積極的に取り組んでいる(特に公立高校)こと。⑤「読み聞かせ」は、2007年度から全国合計を下回ったが、2005年度と2006年度は全国合計より高かったこと。「読み聞かせ」と「学校図書館担当職員」の2005年度以前のデータを把握できなかったが、この期間も同様の傾向が見られると仮定すると、英和大調査の回答者は、小・中学校時代に潤沢な図書購入費のもとで、教員や学校図書館担当職員などから読み聞かせを受けていたのではないかと推察される。

4. おわりに

本稿では、英和大調査とLIPER調査の結果との比較検討をとおして、英和大学司書課程における司書資格取得希望者の特徴を明らかにした。その結果、類似点としては、本が好きで、公共図書館の利用経験を持ち、そのような影響から、司書資格を取ろうとしている点を、相違点としては、英和大調査の回答者の方が、小・中・高校での読み聞かせの機会が多い点を明らかにできた。

この相違点が生じた背景を検討するため、山梨県における学校図書館や読書活動に関する6つの統計データを整理した。その結果、山梨県では、近年、1校当りの学校図書館図書購入費、図書購入費の予算措置率については、公立小・中学校ともに、上位3位以内で推移していることがわかった。また、図書の読み聞かせやブックトーク、全校一斉の読書活動など一連の読書活動の状況については、全国の状況と比べると、前者では公立小・中学校、後者では公立高校での実施率が高い状況を明らかにできた。さらに、学校図書館担当職員の配置状況については、特に、公立小・中学校での配置率が高い状況も確認できた。以上のことが背景となって、LIPER調査よりも英和大調査の回答者の方が小・中・高校での読み聞かせの機会が多くなったのではないかと推察される。なお、本稿は、質問紙調査に基づく筆者個人の見解であり、英和大学司書課程の見解を踏まえたものではない。

注記・引用文献

- 1) 竹内比呂也 他「司書・司書教諭資格取得希望学生の意識についての調査」『2005年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱』p.43-46、2005
- 2) 前掲 1)
- 3) 上田修一(研究代表者)『情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究』2006
- 4) 小田光宏、平野俊英「図書館学教育担当者の意識と教育実態：図書館学教育の実態と改善に関する調査報告：教育担当者編」『図書館界』46(4)、p.150-163、1994
- 5) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課「学校図書館図書関係予算措置調べ(平成18、19年度)の結果について」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/04/08041815.htm、2009.3.26 参照
- 6) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課「学校図書館の現状に関する調査結果」(2001年度～2006年度)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/index.htm、2009.3.26 参照
- 7) 前掲 6)
- 8) 前掲 6)
- 9) 基準財政需要額＝単位費用(測定単位1当たり費用)×測定単位×補正係数(寒冷補正等)
- 10) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」2002.8
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/003.pdf、2009.3.26 参照
- 11) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」2008.3
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031005/001.htm、2009.4.7 参照
- 12) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課「都道府県及び市町村における「子どもの読書活動推進計画」の策定状況に関する調査結果について」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061215/002.htm、2009.3.26 参照